

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 暗黙知及びハビトゥスとの関連における習慣と身体 の考察 (TIEPh第3ユニット 環境デザインユニット)

著者	増田 隼人
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	9
ページ	249-257
発行年	2015-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00007485/">http://id.nii.ac.jp/1060/00007485/</a>

# 暗黙知及びハビトゥスとの関連における習慣と身体の考察

増田 隼人 (TIEPh)

キーワード：習慣、暗黙知、ハビトゥス、身体化

## 0. はじめに

本稿においては、意識的な思惟や判断とは異なるモードで作動し、身体化された記憶として働く習慣について考察する。「体で覚えている」といわれるこの記憶のあり方は、一般に運動技能や職人の技術などと関連付けられるが、それは同時に、私達と、私達の環境世界との特有の関係の仕方をも示すものである。というのも、意識における言語化や対象化を必要とせずには作動する習慣は、いわゆる「主観-客観」といった図式に収まることはなく、むしろ、例えば慣れ親しんだ道具が身体の延長線にあるものとして感じられるように、主観と客観が相互浸透しているかのような次元を私達に示すからである。本稿においては、習慣のこうした特有のあり方について、まずは脳科学的知見を参考にその特徴を捉えた後、マイケル・ポラニーの「暗黙知」や、ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」といった概念と関連付けて考察する。

## 1. 記憶の類型と習慣

かつてウィリアム・ジェイムズは、「生物とは習慣の束である」と述べたが<sup>1</sup>、実際、デューク大学のある調査によると、我々の日常生活における 40%以上の行動は、その場の決定によるものではなく、習慣によるものであるという<sup>2</sup>。反省してみると、私達は、日常さまざまな行為を行うが、その最中において、一連の行為について意識の上で終始注意し、逐一判断しているということは案外少なく、他の雑多なことを並列的に行いながら無意識のうちに遂行していることが多いように思われる。

たとえば、現在まさに私が行っているタッチタイピングにしても、私の意識においては、ディスプレイ上に表示される文字列や、自身の思考の流れに注意の大半が費やされており、キーボードをタイプしている手指の動きに関しては、タイプミスを発見でもないかぎりは特に焦点化されることなく背景に退いている。一度タイピングを始めれば、あとは指の動きに身を任せるままで、「A のキーを左指の小指で押した後で K のキーを右手人差し指で押して……」などと逐一判断しているわけではない。このことはまた、車や自転車の運転等にも言えることで、私達はその行為に慣れてしまうと、同

<sup>1</sup> William James, *"Habit"*, Kessinger Publishing, 2010, p.3.

<sup>2</sup> Charles Duhigg, *"Power of Habit -Why we do what we do and how to change"*, Random House Books, 2013, p.xvi.

乗者との会話に耳を傾けたり、ラジオの歌をロずさんだりしながら、高速度で走る乗り物の動きに合わせてハンドルやブレーキをこまめに調整し、事故を回避する。これらの、いわゆる「ながら行動」が可能になるのは、無意識的とまではいえないにせよ、注意力がかなり分散化された中であっても遂行可能になるほど、その行為が習慣化されているからに他ならない。

脳科学において、長期記憶は、宣言的記憶と非宣言的記憶の二つに大別されるが、習慣はこのうちの後者に分類される。この二つの記憶は、脳の対応する部位も当然異なるが、その働き方の性質にも大きな違いが指摘される<sup>3</sup>。

まず、宣言的記憶は、イメージや言語として意識上に内容を想起でき、その内容を語ることでできる記憶である。たとえば、その中には、「昨日の夕食はカレーライスだった」といったエピソード記憶や、「スプーンは食器である」といった意味記憶が含まれる。対して、非宣言的記憶とは、意識上に内容を想起できない記憶であり、その名の通り、言語等を介してその内容を語ることができない記憶である。この記憶が主に活用されるのは、運動学習や知覚学習などの実践的な行為の中であり、先のタイピングや運転の例にも見られるように、当該の行為の正確性や速度などの処理効率の向上を支える地盤として、この記憶は働いている<sup>4</sup>。宣言的記憶との区別としては、たとえば、自転車とは何かといった知識や、自転車に初めて乗れたときの風景や登場人物等を思い出すのが宣言的記憶であり、自転車に現在乗っている際に実際に活用されている、身体に馴染んだ自転車の乗り方が非宣言的記憶に当たる。哲学的な観点からギルバート・ライルが行った知識の二つの側面に照らせば、「対象を知っていること (Knowing that)」に当たるのが宣言的記憶の領域であり、「方法を知っていること (Knowing how)」に当たるのが非宣言的記憶と言えるだろう<sup>5</sup>。自転車の運転や、歩いたり走ったりといった日々の日常行動は、意識上で対象化すると却ってぎこちなくなることがあるが、それは元々そういう行為が、対象化的な知に依存して行われる種のものではないからだと考えれば納得しよう。歩行にせよ走行にせよ、それらは何の変哲もない基本的行為には違いないが、決して生得的なものではなく、かといって一般的な意味での知識でもなく、骨格や筋肉の安定を基礎として、あくまでも試行錯誤の末に身体技能として獲得されたものに他ならない。

ラリー・スクワイアは、こうした非宣言的記憶ないしは習慣の特性について、「私達は学習し、これらの学習や無数の作業を実際には学習しているのであるが、記憶を使っているということを意識することなく実行できるようになる」と述べている<sup>6</sup>。タッチタイピングにせよ、運転にせよ、単なる歩行にせよ、私達はそれらの行為をある時期に学習したことによって身に着けるのであるが、私達はそ

<sup>3</sup> 宣言的記憶と非宣言的記憶に関する概括は、ラリー・R・スクワイア『記憶と脳 - 心理学と神経学の統合』河内十郎訳、医学書院、1989年、153頁-177頁を参考にしている。

<sup>4</sup> 非宣言的記憶をさらに分化すると、手続き的記憶、プライミング、古典的条件付け、非連合学習などに分けられる。習慣は手続き的記憶に分類されることもあるが、非宣言的記憶全般を総括して習慣と述べる論者もある（スクワイア、前掲書、176頁参照）。

<sup>5</sup> ギルバート・ライル『心概念』坂本百大他訳、みすず書房、1987年、第二章参照。

<sup>6</sup> ラリー・R・スクワイア、エリック・R・カンデル『記憶のしくみ 下』小西史郎・桐野豊監修、講談社、2013年、190頁参照。

の学習内容ないしは学習したということそのものを、意識に表面化することなく、実際のパフォーマンスにおいて発現させることができる。それらの行為は、たしかにどこかで覚えられたものであり、その記憶を抛り所に遂行されているのであるが、当の記憶は意識上に現れず、語ることもできないため、私達は往々にして、それが学習の結果として働いていることを忘れてしまう。そのため、習慣の働きが私達にとって浮き彫りとなるのは、それが滑らかに遂行されているときよりも、むしろ何らかの原因で阻害される状況においてである。たとえば、それは使い慣れた携帯電話を新しい機種に買い替えた直後の、異様な使いにくさを思い起こしてみれば分かりやすいだろう。新しい携帯電話に慣れるまでの間、私達はキー入力違和感に戸惑い、自分の指をやけに野暮ったく感じたはずである。そのとき、私達は、かつての携帯電話の重さやデザイン、操作の感触が自分の身体に深く刻印されており、それを手放した今になっても多大な影響力を持っていることを確かめるのである。また、私は、最近「整備中で動かないエスカレーターを上がる」という経験をしたが、そのとき私は違和感のあまり、車酔いにも似た気持ち悪さに襲われたものだった。おそらく、これも「これまでのエスカレーター」の経験に依拠する習慣に起因する、一種の副作用であろう。認識の側では、エスカレーターが動かないことを十分に承知しているというのに、身体ないしは習慣のレベルで働く予期は、私の認識や意志とは関係なく勝手に作動し、これまで歩いた無数のエスカレーターに相即する身体感覚を覚醒し続けたのである。おそらく、私が酔いにも似た症状を得たのは、その現実の認識と身体レベルでの予期との不整合の連続に原因があったのであろう。エスカレーターを上がるという、それだけの行為にも、たしかに習慣の働きは関与し、身体的なレベルで蠢いているのである。

## 2. マイケル・ポラニーの「暗黙知」

上述したように、私達の日常的行動の多くには習慣が関与しており、しかもその習慣は普段、当の私達自身にも気づかれないうまに働いている。私達は、他人の家に行って初めて家屋には固有の臭いがあることに気づき、故郷から離れて初めて空気の違いに気づく。余所に行って、その環境を新鮮に感じることは、ひとえに私達が元の環境に適合し、そこの臭いや光や空気を、いわば感覚の尺度のゼロ点として身体に刻み込み、述定的な知識とは異なった仕方を知っているためでもある。

化学者であり哲学者でもあったマイケル・ポラニーは、「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」というテーゼのもと、このような通常言説化されえない知のあり方を「暗黙知 (tacit knowledge, tacit knowing)」と名付けた<sup>7</sup>。この暗黙知という概念は、習慣のように既に習得され、非宣言的に活用される知識 (knowledge) を指すと同時に、感覚素材を総合し、直観にもたらず知覚以前の認知プロセス (Knowing) を指している<sup>8</sup>。そのため、暗黙知という概念がカバーする範囲は

<sup>7</sup> マイケル・ポラニー『暗黙知の次元』高橋秀夫訳、ちくま学芸文庫、2003年、18頁。

<sup>8</sup> 暗黙知の特に後者の性質は、中・後期のフッサール現象学において明らかにされた、自我意識を伴わずに作動し、能動的志向性を基づける「受動的綜合」の能作との高い近似性が見られる。

幅広く、歩行や運転、道具の使用といった技能のみならず、知覚そのものも暗黙知の産物とみなされる。たとえば、ポラニーは、暗黙知の特徴を、人の顔の表情認識を例に出して説明している。私達は、対面した人の気分や感情の動きを、その表情から察することができるが、それを顔のどの部分から読み取っているのか述定化することは困難である。その語ることをできない部分として表現されるのが「暗黙知」である。

ポラニーは、暗黙知が働く際の機能的関係として、二つの条件を挙げ、一方を「近位」、他方を「遠位」と表現する<sup>9</sup>。先の表情の例で言えば、顔の個々のパーツが近位であり、それに対してより包括的に捉えられる表情の方が遠位である。あるいは、もっと深く掘り下げて考えれば、眼球運動などにまで近位は遡れるだろう。ポラニーは、暗黙知が働いているときには、この近位項から遠位項への注目の移行が起こっているのだと指摘する<sup>10</sup>。ポラニーによれば、暗黙知が働くとき、私達は、あるもの（近位）を出発点として、別の何か（遠位）に注意を向けている。たとえば、人の表情を読み取る際には、近位たる顔のパーツを出発点として、より包括的な表情の読み取りという遠位に向かう。しかし、このとき、注意の当の対象は当然ながら表情全体の方にあり、個々のパーツの印象の統合は、意識の背景において行われ、観察者によって認知されるのは、それらの近位項が既に総合された後の顔となる。そして、その結果、私達は事後的に「顔のどの要素からその人の感情を読み取ったのか」と問われると、返答に窮することになる。というのも、そのとき、近位項は既に、暗黙知の働きによって、遠位項の包括性の中に取り込まれてしまっているからである。換言すれば、私達はつねに、近位項を直接的には意識できず、遠位項を通して間接的に知るのみである。このように、近位項が遠位項の中へと埋没することを、ポラニーは「内在化」と呼ぶ<sup>11</sup>。

前述したように、遠位項に内在化した近位項は、私達にとって捉えにくいものとなるが、ポラニーはむしろこのことにポジティブな意見を持っているように思われる。というのも、ポラニーが主張するのは、人が新しい技能や理論を身につけるのに際して最も良い方法は、対象の諸細目を部分的に学んだり捉えたりすることではなく、対象の全体に内在的に没入することにあるからである。ポラニーによれば、全体像に部分項目を加え、その部分を説明したり意味付けたりするのは、かえって全体の意味を消滅させ、知識の全体性を破壊することに繋がるという。すなわち、対象を分節化するのではなく、全体性として総合する働きが暗黙知であり、ポラニーの重視するところなのである。

<sup>9</sup> あるいは、ポラニーは、暗黙知を示す例として、閾下知覚の実験なども示している。この実験において、被験者は多数のたらいめな綴り字を見せられた直後に電気ショック与えられる（ポラニー、前掲書、23-27頁）。被験者は、どの文字が電気ショックを誘発する「ショック綴り字」であるのか認知できないが、電気ショックを繰り返行うと、その識別ができないままなのにも関わらず、ショック綴り字を見せられるだけで「電気ショック」を予期するようになる。このことは、認知能力を伴わなくとも暗黙知が形成されうること示している。

<sup>10</sup> ポラニー、前掲書、23頁。

<sup>11</sup> ポラニー、前掲書、36頁。

### 3. 暗黙知と身体

ところで、ポラニーは、身体について、「私たちの身体は、それが知的なものであれ実践的なものであれ、すべての外界の認識にとって究極の道具である。……私たちの身体は、私達自身が普段は決して対象として経験することはないが、身体から発して意識される世界を介して経験する、この世で唯一のものである」と述べる<sup>12</sup>。いわば、身体は、ポラニーにとって、近位項の極としてあると考えられているといえる。その意味でいえば、身体知とは原則的に暗黙知として獲得される知であるといつてよく、私達の感知する環境世界とは、身体が暗黙的に内在化した世界である。

暗黙知によって架橋される、ポラニーのこのような身体と環境の関係は、メルロ＝ポンティの身体論・習慣論との類似性が見受けられる。メルロ＝ポンティは、私達は、世界に対して一種の対立項としてあるような客観的存在として世界にいるのではなく、身体において、あるいは身体を媒介として世界に臨んでいると指摘する。これは、すなわち、身体がその運動能力や運動感覚といった直接的な経験において、根源的に世界を志向している、開かれているという意味である（身体の志向性）<sup>13</sup>。メルロ＝ポンティは、習慣とは、思惟や客観的な身体に宿るのではなく、世界の媒介者としての身体に宿るのだとし<sup>14</sup>、身体と世界との結びつきについて、次のように述べている。

「経験は、客観的空間の下にある原初的な空間性を顕わにする。この空間性は、身体が存在そのものと区別されえぬものであり、客観的空間は単にその外皮にすぎない。身体であることは、ある世界に結びつけられていることであり……われわれの身体は最初から空間の中にあるのではない。それは空間に臨んでいるのである」<sup>15</sup>

私達は、世界を、常に運動能力や運動感覚を備えた身体を介して経験する。メルロ＝ポンティは、ある運動を習得するとは、それを自己の「世界」に統合することであるとし、「身体を動かすことは……表象を全く媒介としないで身体に働きかける物の促しに、身体をして勝手に答えさせることである」と述べる<sup>16</sup>。習慣は、身体的なものとして、そして暗黙的な実践知として、そこに関わる。すなわち、習慣化とは、身体像の修正ないしは更新の仕組みであり、表象化以前の次元における世界との新たな関係の仕方を獲得することである。このように見ると、ポラニーとメルロ＝ポンティの類似性は明らかであり、二人は同じものを別の観点から問題にしたのだといえよう。

<sup>12</sup> ポラニー、前掲書、36-37 頁。

<sup>13</sup> 身体のこのような志向性は、フッサールにおける、本能志向性や衝動志向性に対応するものとして考えられる。ポラニーの暗黙知とメルロ＝ポンティの身体論はさらに、フッサールにおける受動的総合の領域と関連付けることが可能であるだろう。

<sup>14</sup> モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』中島盛夫訳、法政大学出版局、1982 年、246 頁。

<sup>15</sup> メルロ＝ポンティ、前掲書、251 頁。

<sup>16</sup> メルロ＝ポンティ、前掲書、236 頁。

#### 4. ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」

先にも述べたように、ポラニーは、暗黙知が成立する条件として、近位と遠位の両方を置いている。遠位項の存在、換言すれば知覚を含んだ行為の主題の設定が、暗黙知が暗黙的なものでありうる前提条件の一つであるとすれば、当然のこととして、その主題を設定し、遂行する主体の存在もまた欠かせないものとしてある。ところで、ある目標を達成しようとする時、私達人間はあくまでも具体的な時間・空間に場を占める存在として現われる。すなわち、重力を有する地球環境や、人間生活に関わる社会的状況、そしてその時々々の文脈に応じた場の状況と無縁ではいられない。そこにはまた、歴史的、文化的な制約も含まれているし、あるいは更に洞察すれば、生物学的な遺伝子の影響さえも考えられるかもしれない。ポラニーの暗黙知が、どちらかといえば認知的な観点から捉えられることが多いのに対して、こうした社会や文化や伝統といった歴史的世界との関係をより強く押し出しているのが、社会哲学者のピエール・ブルデューの提起する「ハビトゥス」という概念である<sup>17</sup>。

「Habitus」というラテン語は、元は「habere（持つ）」という動詞に由来し、トマス・アクィナスが、アリストテレスの用いた「Hexis」というギリシャ語に対訳したものである<sup>18</sup>。アリストテレスは、Hexisを人間の固定的・定常的な性向として定義しており、その内実に「能力の所有」や「状態の保持」、「習性」などという意味連関を担わせていた。また、彼は、Hexisの発生について、これは自然本性によって素質として持っているものであり、習熟によって完成形が獲得される、いわば変化の途上にあるものとした。ブルデューのハビトゥスも、同様の性質を備えたものではあるが、彼はそこに独自の定義を加えることで、それをさらに特殊な概念へと変化させた。即ち、ブルデューは、ハビトゥスを、根源的に社会的なものとして獲得され、身体化されたシステムであると定義したのである。

ブルデューによれば、ハビトゥスとは、それぞれの社会的位置における経験の最中で形成された、「構造化された構造」である<sup>19</sup>。すなわち、ブルデューによれば、ハビトゥスないしは身体とは、そもそもの最初から歴史的・文化的な刻印を引き受けたものなのであるといえる。とはいえ、そのことによって、人間は外的世界に囚われ、従っているのかということ、そう単純な話でもない。というのも、ハビトゥスとは、従う・従わないといった意志以前に、気づいたときには既に作動しているといった類のものだからである。そういった意味において、ハビトゥスは、私達にとって外的・内的の区別などなく、身体と同様に既に同化しているものとして捉えられる。

また、ハビトゥスは、周囲世界に対して一方的にただ受け身の側に立つものではない。ハビトゥスは、一方では、それ自体が実践や表象を産出・組織化する原理になり、「構造化する構造」としても働

<sup>17</sup> 本人も自認するところであるが、ハビトゥスを中心概念としたブルデューの社会学は、レヴィ＝ストロースの構造主義に代表される客観主義と、シュッツに始まる現象学的社会学に代表される主観主義との対立を解決しようとする試みとして提唱したものである。そういった思想史的な概要については右記参照（田辺繁治「再帰の人類学における実践の概念」『国立民族学博物館研究報告 26 巻 4 号』533-577 頁）。

<sup>18</sup> 矢野喜夫「資質の概念」『京都教育大学紀要』京都教育大学、1986 年、69 頁参照。

<sup>19</sup> ピエール・ブルデュー『実践感覚』今村仁司・港道隆訳、みすず書房、1988 年、89 頁参照。

くのである。ブルデューは、ハビトゥスを、「歴史の生産物」と称し、「それら過去の経験は、各々の組織体に知覚・思考・行為の図式という形で沈殿し、どんな明確な規則よりも……時間の推移の中で実践の恒久性を保とうとする傾向をもっている」と述べる<sup>20</sup>。すなわち、ハビトゥスは持続性を具えた慣習的な実践の原理ということになる。また、宮島によれば、ハビトゥスは、「所与の構造（たとえばある階級の生活諸条件）のなかで行なわれる社会化の所産であって、その構造への事実上の適合性という性格をも持っている」とされる<sup>21</sup>。このように、ハビトゥスは、実践的行為の恒常性や、所与の構造への適合性を含んだシステムである。そして、歴史という共通性をもった地盤から生じたハビトゥスによって、人々は互いに息を合わせようという意図なしでも調和した行為をとれることとなる。その意味で、ハビトゥスによる実践は、暗黙知と同じく、意識的な注意に依らずに働くものであり、ブルデューは、このことを「集合的にオーケストラ編成されながらも、オーケストラ指揮者の組織行動の産物ではない」という比喻によってハビトゥスの性質を語る<sup>22</sup>。ここには、明確な規則や社会的システムとは異なり、一種の雰囲気のようにして働くハビトゥスの役割が垣間見られる。

ハビトゥスは、身体化された実践の原理であるという点も暗黙知と同様の特性を持っており、意識化以前に実践を方向づけるという重要な働きを示す。ハビトゥスが産出する実践には規則性があるが、それは規則に行為者が単純な意味で従属していることを意味するのではない。ハビトゥスは、身体化されたシステムであり、従う・従わないの判断が介するその手前で、行為者は、身体化したハビトゥスに導かれて、目的や手段を意識的に熟慮しなくても適切な行為をとることができる。行為者は、実践の原理としてハビトゥスを所持しているが、その原理を意識して使うのではなく、むしろ実践の最中に没入している方が、かえってうまくその原理を制御できるとされる。また、ブルデューによると、ハビトゥス概念は、社会構造に適合した規則的な実践を産出する側面と、即興的に多様な実践を生みだす「発明術」という創造的な側面が同居していると述べられる。この見方によれば、規則性と規則性から外れる面を同時に併せ持ったハビトゥスは、規則性とその変化の両方を射程に収める両義的な概念ということになるだろう<sup>23</sup>。

クロスリーは、このように、ハビトゥスを主要概念として押し出したブルデューの試みを、習慣についての議論を社会学における中心的課題へと高めたものであると評価している<sup>24</sup>。社会が個人を作るのか、個人が社会を作るのかという二項対立に社会学が悩まされたときに、ブルデューは、ハビトゥスを伴った身体という局面を設定し、社会が行為者の内に身体化（内在化）され、その行為者が社会をまた作るという循環的な構造をそこに見た。多くの論者が指摘するように、ブルデューの理論が、

<sup>20</sup> ブルデュー、前掲書、86 頁。

<sup>21</sup> 宮島喬『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開』藤原書店、1994 年、277 頁。

<sup>22</sup> ブルデュー、前掲書、84 頁。

<sup>23</sup> とはいえ、歴史的産物であるといわれるハビトゥスが、如何にして創造という、いわば歴史からの変革ないしは断絶を為しうるのかは、ブルデューの議論からは明瞭ではない。

<sup>24</sup> ニック・クロスリー『社会的身体——ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』西原和久・堀田裕子訳、新泉社、2012 年、16 頁参照。



真に原理的に主観-客観の対立を乗り越えるものであるかは、たしかに議論の余地がある。しかし、ハビトゥスを中心的概念として据えるその視座は、歴史的な世界の中で誕生し、生きていく私達が、いかにしてその世界を担っているのかという問いに対し、重要な示唆を与えるものである。

## 5. おわりに

本稿では、習慣に関する脳科学的な研究を導入とし、ポラニーの暗黙知やブルデューのハビトゥスといった概念を俯瞰してきた。「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」というのがポラニーの最初のテーゼだったが<sup>25</sup>、実際に私達の知の形態は、認知的・言語的な制約に縛られない幅広さを持っており、私達の身体は、自分自身でも捉えきれないほどの情報を処理し、それらを含蓄しながら生きている。私達が普段認識している以上に身体は世界に反応し、様々な調整機能を働かせている。そして、私達が習慣性の作動する最中にあるとき、私達は世界が自己の身体性の内に根付いていることを経験するのである。

---

<sup>25</sup> ポラニー、前掲書、18頁。

## A Study about Habit in Relation to Tacit Knowledge and Habitus

MASUDA Hayato

The concept of habit (Greek *hexis*; Latin *habitus*) has long been recognized by philosophers as playing a central role in human intentional practical activity, in the acquisition and solidification of practical knowledge, and in the formation of character.

In this article, I consider Habit and embodied knowledge, connecting tacit knowledge and *habitus*. These concepts are common at the point that does not need an act of awareness and will of ego. And they enfold an enormous richness and diversity of meanings.

Tacit knowledge is the concept by Michael Polanyi. He says, "We can know more than we can tell". His studies start from this thesis, and show us a new form of our knowledge. It is process of knowing without awareness.

Other hand, *Habitus* is a traditional concept on philosophic history. However, it especially is known as the very important concept of Pierre Bourdieu. He defines it "structuring structure", which organizes our practices and life style.

This article tries to make clear the mode of habit with these concept as clue.

Keywords : Habit, tacit knowledge, *Habitus*, practice, embodied knowledge